

R3 (2021) 年度 和歌山大学教育学部共同研究事業

小学校における外国語活動・外国語科の授業づくり

尾上 利美 (和歌山大学教育学部)・森川 英美 (和歌山市立藤戸台小学校)

川島 啓司 (和歌山市立藤戸台小学校)

1. 研究課題について

本年度は、平成 29 年 3 月に改訂された小学校学習指導要領が全面実施となって 2 年目である。新しく中学年に導入された外国語活動ならびに高学年で教科化された外国語の授業も 1 年を経て、授業を担当される先生方も、新教科書を用いた授業づくりに随分と慣れてこられたように思う。本研究課題は、外国語科および外国語活動の授業づくりを実践的に検討し、授業実践事例の蓄積を目的とする。GIGA スクール構想で整備されたタブレット端末を効果的に用いることもねらいとして定めた授業実践を行い、今年度は特にその成果と課題について検討した。

2. 取り組みについて

昨年度より続く新型コロナウイルス感染症対策にともなう様々な予定変更や対応で多忙な中、本研究の共同研究者である森川先生、川島先生、研究代表者の尾上で時間を調整し、単元計画と学習指導案作成の検討会を持った。検討した授業は、公開授業および研究授業として実施され、授業後に開かれた協議会では、授業を参観して下さった他の先生方からも貴重なご意見を頂戴した。

以下は主な取り組みの日時と内容である。なお、藤戸台小学校と和歌山大学が非常に近いところにあるという立地を活かし、お互いに円滑に行き来することができた。

6 月 10 日 (木) 16 : 40 ~ (@藤戸台小) 共同研究打合せ

8 月 23 日 (月) 14 : 00 ~ (@藤戸台小) 学習指導案の検討

10 月 7 日 (金) 16 : 30 ~ (@和歌山大学) 学習指導案の検討

10 月 29 日 (金) 13 : 15 ~ (@藤戸台小) 川島先生研究授業 (4 年 5 組)・協議会

11 月 18 日 (木) 17 : 00 ~ (@藤戸台小) 学習指導案の検討

11 月 30 日 (火) 10 : 30 ~ 11 : 10 (@藤戸台小) 森川先生 研究授業 (5 年 1 組)

11 月 30 日 (火) 16 : 00 ~ 17 : 00 (@藤戸台小) 協議会

タブレット端末を効果的に活用した授業づくりにおいて、藤戸台小学校の GIGA 部にも所属する川島先生の ICT 技術と授業アイデア、外国語専科としての経験もある森川先生の言語活動のアイデアと教材作成力が活かされた取り組みであったと考える。

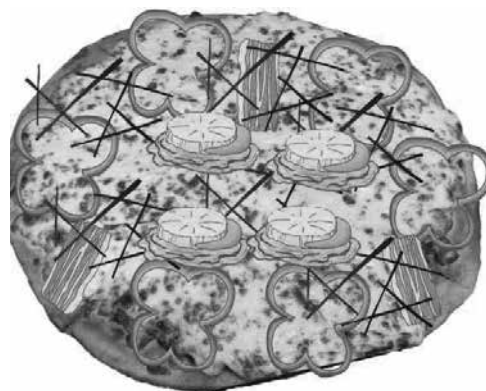
3. 授業実践から

①『What do you want?』の実践について（4年5組）

4年5組の課題は、相づちや反応を含めた相互のやり取りが少ないことであった。原因は①話すこと(やり取り)の活動が少ない点と、②やり取りの際に相手意識を持ち「伝えたい」と感じる活動を設定できていない点であると考えた。今回は、Let's Try!2 Unit7 What do you want?の単元で、子どもが端末を通しピザに必要な食材を交換するために、2往復以上の英語でのやり取りする活動を設定した。その際、端末を活用することで上に示した原因の解決に取り組んだ。

今回の授業での端末活用の利点は大きく2点あった。1つ目が、授業(運営)上の利点である。データがすぐに復元でき、配布・回収に時間がかからない。また、紙と違いサイズを変えられるなど操作性に優れている点などである。また、授業検討を行ううちに、子供のやり取りを録画し、指導や評価に活用するという新たな活用法も発見することができた。

2つ目の利点は、対話の活性化における利点である。教師がピザの編集権限を制限することで、相手に伝えるために言葉を使う必要性を生むことができる。また、画面上でリアルタイムにピザの様子が変わるため、自分の伝えたい内容とのずれをすぐに判断でき、「より詳しく伝えたい」と意欲的に活動することができた。これにより、子どもたちは相手の操作に対して、すぐに”No, No!”と身振りや表情を交えて反応したり、何とか相手に食材を間隔を空けて置いてもらおうと”Big triangle”と表現をひねり出したりと、相手に「伝えたい」という思いをもって取り組むことができた。



一方で、新たな課題も出てきた。1つ目は、端末を使うことで子どもたち同士のアイコンタクトが減り、画面を注視しながらのやり取りが見られたことである。今回の活動では、画面を見ながら確認する必要があったとはいえ、普段から、相手意識を持てるようにする呼びかけや、確認を習慣的に行っていく必要があると感じた。

2つ目は、一部の端末を録画に回したことにより、やり取りに参加しにくい子どもがいたことである。今回は店員2人のうち、1人の端末を記録用の動画撮影に使用した。これにより、手で食材の移動状況が見られない子どもの一部が、会話に参加しづらくなってしまった。2人で端末を共有することを事前に指導したり、2人で協力して注文を取るという設定を伝えたりしておく必要があった。

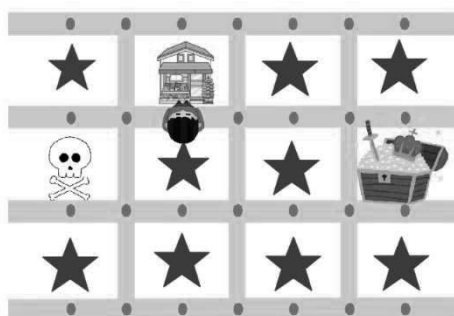
3点目は、授業者の外国語の活用力の低さである。食材をリスト化している際、尾上先生から「単複同形の食材が含まれていて子供が混乱するのではないか」とご指摘をいただいた。授業者は、そこまで考えが至っておらず、初めは何を指摘されているのかさえもわからなかった。また、授業後の協議会でも、参加者からクラスルームイングリッシュの積極的な活用を行うべきという旨の意見をいただき、普段からの指導について考えるよい機会となった。以上の点を踏まえ、今後の授業づくり、指導力の強化に取り組んでいきたい。

(川島 啓司先生)

②『Let's find the treasure!』の実践について（5年1組）

本年は「子供達が主体的に外国語でコミュニケーションをとりたいと思える授業づくり」をマイテーマに設定し、外国語科の授業を進めてきた。1学期に実施したアンケートによると、93%の児童が外国語の授業を楽しんでいると感じていた。しかし「習った英語を使って、発表したりやり取りしたりできますか?」という質問に対しては、「あまりできない」「できない」と答えた児童は30人中7人いた。パフォーマンス評価やリスニングテストの結果は高いのだが、自信をもって英語で発信することにまだまだ課題があるとわかった。そこで本単元では、(1)「英語で伝えたい!」と思える必然性のあるパフォーマンス活動の設定、(2)他者に配慮しながら英語を使ったやり取りができるようになることの二点を意識し、単元計画を練っていった。

Lesson5 Where is your treasure? では、Go straight.や Turn right.等の表現を使って道案内し合えるようになることがねらいである。必然性のあるパフォーマンス活動を設定するため、今回はタブレットを利用し、プログラミングと道案内を組み合わせた宝探しの活動に単元を通して取り組ませるようにした。今年度から始まったタブレットを利用した授業に児童は高い関心を示している。また、Google Earth 等、インターネット上の地図を利用して目的地に行く機会も増えている。これらのことから、タブレット上で道案内をし合う活動は必然性が高く、児童も意欲的に活動に取り組めるだろうと考えた。プログラミングの基礎を学習することができる Scratch というサイト内で下のような地図を授業者が作成した。



Go straight.と指示されたら↑のボタンを、Turn left.の時には←のボタンを押すとキャラクターが指示通り動くように設定した。児童はまずこの地図を使ってリスニングクイズに挑戦した。12の建物のどこに5つの宝箱が隠されているか予想し、Where is the bookstore?等と尋ね、道順を聞いていく。辿り着いたら★印を押し、尋ねた場所と同じであればもう一度クリックし、宝箱があるかどうか確認するという活動である。児童は道案内の

表現を初めて扱った時間にも関わらず、英語表現を正確に聞き取り、スムーズに操作することができていた。今まで紙の地図を使った活動では、地図を読むことが苦手な児童が自分の向いている方向がわからなくなることが多くあった。一方、Scratch 上では、right/left をきちんと聞き取りボタンを押すだけで、左右戸惑うことなく目的地に辿り着くことができる。タブレットの利用によって、道案内の活動に対する苦手意識をひとつなくすことができたのは、幸運であった。授業者は上記の地図を班ごとにサイト上で配布し、宝箱を好きな場所に隠してポイントを競わせる活動を単元最終に行おうと考えていた。しかしその活動では、子供たちがどうしてその場所に宝箱を隠したのかという必然性がないのではないかと尾上先生にご指摘していただいた。ただ当てずっぽうに Where is the...?と尋ね続けるのはあまり知的な活動ではなく、深い学びにつながらないと考えた。そこで、町のどこに誰が隠れているか推理するゲームに活動を変更することにした。例えば「この子は将来警察官になりたいから、police station に隠れていると思う!」というように、児童は友達がどこにいるか予想を立ててから目的地への道を尋ねるようにしたのだ。その結果、児童は皆活動に意欲的に

取り組むことができた。振り返りには「道案内をするのが楽しかった。」「作戦を立てたら、4人見つけられた！」等のコメントが多くあり、「道案内をスムーズにすることができた」「友達の道案内をしっかり聞いて、目的地に辿り着くことができた」と回答した児童はどちらも90%を上回った。児童が意欲的に取り組める活動の設定をするということは達成できたように感じる。

一方、他者に配慮しながら英語を使ったやり取りができるようになることについては課題が多く残った。本活動における「他者に配慮する」ことについて授業者は、「相手が理解して道順を辿れているかどうか確かめながら道案内をすること」だと考えていた。しかし、タブレットを利用したことで、児童の多くがタブレット上の地図を注視し、お互いにアイコンタクトをせずにやり取りをしてしまっていた。また、3人グループの所では、タブレット1台を共有して使わせていたため連携が難しく、同じグループの子が聞いている時には画面を見ずに過ごす子もあった。タブレットを利用する際は、情報共有のさせ方をきちんと授業者が指示しておくべきだったと感じた。一方で、道案内を聞いている際、相づちを打ちながら聞く子やRight? Left? 等と聞き返す子もいた。このように反応しながら英語でのやり取りを行っている子をクラス内で紹介し、全体に真似するように指導者が声かけを行えば、より生き生きとしたやり取りを児童ができたように感じる。以上の点を踏まえ、今後の授業づくりに活かしていきたいと思う。

(森川 英美先生)